

# オリオン星座

## 星見小路 虚

### (一)

新酒にびざけのホロリとした氣分で結構だ。星好みの人達は、新春のよるこびを星にも申し給へ。それも五分か十分もあれば充分で御座らう。齋藤縁雨は『酒の上にて』月に對して管をまいたが、冷風に屠蘇の酔をさましながら星に管まくも又格別で御座らう。一月も一日二日がよからう。又仕事でもはじめるぞ、何か急がしからう。夕方も『思はるかに人が灯もす頃なれば』か。先づ六時頃戸外に立つて東の空を眺め給へ。東の土地の果から、眼のさめるやうに上つて来る星座がある。

丁度其頃は天の河が東の地平に大體直立するが、此の壯麗な星座は天の河の右岸にある。オリオンの星座は即ちそれである。挿繪はその有様の見取圖であるが、星と星との距離や角度は正確でない。けれども、大體挿繪を見て、實際の空を見ればハハー此の星があればな位はわからうと思ふ。

オリオンの星座は天球上の最美麗な景色で誰でも一度聞けば、決して忘れる事がない。否、讀者諸君は全部、よし名前は知らなくても、そう言ふ美しい星座がある事は充分に御存知の事だと思ふ。且つしばし眺めて居られるに違いない。大體の構造は四角な箱の中に柄のついた『ます』があるを考へれば間違はない。九州地方でこの中の星々を『酒屋のます』と言ふが、實際そう言ふ感じがする。やはり正月だから屠蘇酒に關係があるらしい。

さて外の四つの星は $\alpha$  (アルファ)  $\beta$  (ベタ)  $\gamma$  (ガムマ)  $\kappa$  (カツバ) の四つであるが、アルファとベタは一等星である。アルファは特に赤い色をして居るので一見して見わけの事が出来るが、此の星は特に尊んでベテルゲウスと言ふ特別な名前までつけてある。他はみな白い色である。ベタも又著しく大きな星で此の星はリゲルと言ふ名前がついて居る。ガムマとカツバは二等星である。

次に四角な箱の中の『酒屋のます』であるが、そのうちの三つは特に光が強く一直線にならんで居る。支那では昔からこれに『參』シと言ふ名前を附した。上から順次に $\delta$  (デルタ)  $\epsilon$  (エプシロン)  $\zeta$  (ジタ)と言ふ名前がついて居るが三つ共二等星である。 $\zeta$ の反対側にある星は三等星で $\eta$  (イター)と言ふ。又柄の先端の星も三等星で $\iota$  (イオタ)と言ふ。他は皆もつこ幽かな星である。此の外、圖に描かなかつたが、四等星や五等星は以上のべた星々の附近に無数に存在して居る。試ろみに周圍の四角な四つの星から出来て居る箱の中だけに幾つ程の星を見る事が出来るか數へて見たまへ。

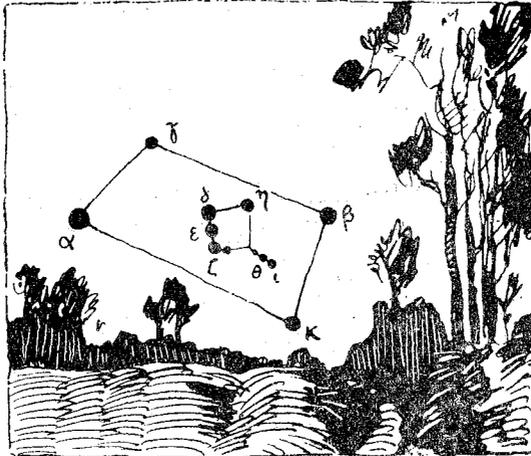
酒屋のますの柄は五等二つとイオタの三等まで三つからなつて居るが(もつ

と詳しく言へば六等星が今一つあるが) その三つの星の真中あたりがほんやりして居る。即ち  $\theta$  (テタ) と言ふ星の所が肉眼で見ただけでもボンやりと光つて居る。これが有名なオリオンの大星雲で小さな望遠鏡で見てもよく見える。本誌の巻頭はオリオン大星雲の寫真である。

## (二)

以上オリオン星座の紹介を試みだが、以下オリオン星座にからむ傳説を物語らう。

昔々、いつの世とも知れぬ大昔にアトラスと言ふ天球を支へる神様があつたが此の神様と水の精ニムロミの間に出来た子にプレアデス(スバル)と言ふ



世にも美しい七人姉妹のお姫様があつた。此のお姫様達は容姿も美しかつたが心も清く七人ともそれはそれは美しい仲であつた。で、いつも七人揃つて居るのが常だつたが或日七姉妹は打揃ふてボエオチャと言ふ森を逍遙して居た。所がその近所には一人の大力無雙な傲慢な獵師が住んで居て、それがオリオンなのである。諸君は昔の星圖を御覧になるにオリオン星座の一帶に體軀偉大な壯者を見るであらう。それがオリオンである。所がそのオリオンが丁度その森にやつて来て、美しい七人の姫達に懸想した。そして執念深く彼女達の後を追ひ廻すので七人は息も切れ切れに逃げ廻つたが、息切れて將に捕へられやうとした時に、その時分に世界を支配して居た神様のジュピター(木星)は可愛想に思つて七人を可愛らしい鳩にして天上に飛ばせたと言ふ。それが今日のプレアデス星團(スバル)で、オリオン星座の中の大きな三つの星を西北に延長するこすぐに發見する事が出来る。(プレアデスに就いては前號の天界を見よ)。

所でオリオンと言ふ獵師は仲々の傲慢漢で或時『世の中の動物で此の俺が征服する事の出来ない奴はない』の自慢した。するまじ Jupiter の皇后のジュノーは此れを聞いて大變怒り早速一匹の恐しい蝸を送つてオリオンを刺させたので、流石の大力のオリオンもすぐに死んで仕舞つたと言ふ。蝸は天球上ではスコルピオ星座で夏の夕に南の地平線に見える。所が面白い事にスコルピオ星座まオリオン星座まは天球上約百八十度も離れ全く正反對の所にある。支那ではオリオンを『參』ふ事は前にも言つたがスコルピオは『商』ま言つて有名な杜甫の詩にも

人生不相見。	動如參與商。
今夕復何夕。	共此燈燭光。
少壯能幾時。	鬢髮各已蒼。
訪舊半爲鬼。	驚呼熱中腸。
焉知二十載。	重上君子堂。
云々。	

なごま言つてめつたに相遇はぬ譬へに迄用いられて居るがこんなに離れた蝸がオリオンを刺し殺したまはさても長い蝸の針では御座らぬか。

## (三)

扱て今度は東洋に歸つて參ま商まの傳説を物語らう。左傳に  
子產曰。昔高辛氏有二子。伯曰闕伯。季曰實沈。  
居干曠林。不相能也。日尋干戈。以相征討。  
后帝不臧。遷闕伯于商丘。主辰。商人是因。  
故辰爲商星。遷實沈于大夏。主參。唐人是因。  
以服事夏商……………故參爲晋星。

まある。筆者は漢文の知識が貧弱だから或は讀み違へるかも知れないが此れによれば、昔々高辛氏ま言ふ人に二人の男の子があつたが兄の方を闕伯ま言い、弟の方を實沈ま言つた。そして曠林ま言ふ所に住居をして居たが、さうしたもののか兄弟仲が大變悪くて毎日毎日武器を執つて喧嘩ばかりして居たので、その後天子様が兄の闕伯を商丘ま言ふ所に遷した。闕伯はその地方(南の方)でよく見える夏の星の『辰』を守本尊ました。だから商の人達は此の星によつて一年の季節なり曆なりをきめたま言ふ。だから此の星を又商星ま言ふ。又天子様は弟の實沈を大夏ま言ふ國に遷した。實沈はその地方(北の方)でよく見える星の『參』を守りました。云々ま。

東西兩傳説共オリオンまスコルピオの星座が仲の悪い所が面白いではないか。